

本学共通教育における中国語は、教育地域科学部では第一、第二外国語として、また工学部では第二外国語として開講している。第一外国語のクラスや再履修クラスを含めると現在、中国語は1学期17クラスが開講されている。恐らく福井大学では英語の次に多く学ばれている外国語であろう。いつごろからこのように履修者が増加したのかは分からないが、私が本学に赴任した1998年には既に受講者数は現在と大差なかったような気がする。これは本学だけに見られる現象ではなく、全国的な傾向のようである。その主な理由として、日本社会における中国の地位（影響力）向上という認識の定着が考えられる。それは、GDPや国際競争力の大幅な伸びなど経済的な側面によるものであろう。

このように、現在では大学での中国語教育・学習は一般的になったが、日本の中国語教育・学習は、民間が主要な役割を担ってきた。独語や仏語は、大学（教育機関）から民間へ広がっていったが、中国語は民間から大学へ入っていった外国語なのである。それは、本学の位置する福井県でも、大学をはじめとする教育機関以外にも、県人口の割には多くの中国語講座が開講され中国語が学習されていることから分かる。

最近になって、社会の変化が大学にまで及ぶようになった。大学が身近になった表れかもしれない。他学問と同様に実用性が求められ、教養としての外国語よりもスキルとしての外国語が強調される傾向にある。しかし、民間から大学へと広がった中国語は、もともとスキルとしての意味合いの方が強かった。戦前の教科書や学習書も、戦後から現在に至る教科書や学習書も、中国語は挨拶などから習得するように作られている。しかし、中国社会・文化の理解などの教養部分については、戦後まで漢文に任せきりにされていた。このねじれ現象により、戦後しばらくまで漢文と中国語が混同されてきた。中国語は外国語であるという当たり前のことが、定着するのにかなりの時間を費やすこととなった。

本学の中国語履修者でも、中国語は漢字を用いて表記するので、いまだに学び易いと思い選択する学生がいる。

そういう学生もすぐに、そもそも言語は第一義的に音であることを思い知ることとなる。中国語を学びに来たのに授業では、しばらくの間は漢字が出てこないのである。漢字の読みをラテン文字で表すピンインというものを学ぶのである。そのピンインのなかでも、まず初めに学ぶのが声調である。以前の学生に比べて全体的に習得は速くなったように思う。しかし、なかには上手く習得できず嶺北方言なまりの中国語になってしまう者もいる。日本語なまりではなく嶺北方言なまりなのである。

私は生まれも育ちも大阪であるので、関西弁なまりの中国語に気づかなかったのかも知れない。こちらに赴任してからは、すぐに嶺北方言なまりの中国語に気がついた。中国語にあるということは、英語やドイツ語、フランス語でもありそうだ。他の地域は知らないが、名古屋弁の中国語、鹿児島弁の中国語などもあったら面白い。

言語研究者としては、このような言語現象は、研究的価値のありそうな貴重な存在であるが、中国語担当者としては、一人でもこのような学生を減らしていかなければならない。複雑な心境である。各方言母語話者用の効率的な発音教授法の研究を誰かやってくれないかと思う。

大学院生のころ、上海で日本語を教える機会が与えられた。上海人に濁音の音を教えるのは北方人に教えるよりは随分楽だった。よく上海方言と北京方言はドイツ語とオランダ語あるいはドイツ語とフランス語くらい違うといわれる。方言差の大きい中国で、各方言区別の日本語教科書が作られるほうが、現実味を帯びているような気がする。